平成26年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業
青年期・成人期発達障がいの対応困難ケースへの危機介入と治療・支援に関する研究
分担研究報告書

日本語版 DISCO ユーザーによる評価

研究代表者　　内山　登紀夫（福島大学大学院人間発達文化研究科）
研究協力者　　蜂矢　百合子（よこはま発達クリニック）

研究要旨
本邦における第 1 回日本語版 DISCO セミナーは、2007 年に英国より Gould J 博士を迎えて開催された。これまで、英国および諸外国での DISCO セミナーおよびその臨床的有用性についての報告は少ない。本研究の目的は、日本版 DISCO セミナー受講者による 6 年間の評価の報告、および日本版 DISCO の臨床的有用性と限界を明らかにすることである。対象と方法：2014 年８月、日本語版 DISCO セミナーを受講、認定された 82 名のうち参加への同意が得られた 49 名にアンケートを送付し、46 名について回答を得た（46/82=56.1%）。結果 1　日本語版 DISCO 認定者について：発達障害の専門家としての経験が長く、日常業務でも多く発達障害ケースを扱っていた。DISCO 認定者は、さまざまな質問紙や評価ツールを使用し、自閉症スペクトラム、DSM、ICD などの診断を重複使用していた。結果 2　DICO 認定者は、DISCO をいかに使用しているか：半数以上の DISCO 認定者が DISCO を臨床業務に用いていたが、マニュアルを部分的に／考え方として利用していると回答するものが少なくなかった。初診に DISCO を用いているとの回答が約半数であった。結果 3. DISCO の有用性と限界：DISCO の有用性を、「自閉症特性の必要な情報をとるため」「専門家である自分自身が担当ケースをより理解するため」、という選択肢が高率に選ばれた。限界・改善点として「時間がかかり過ぎる」との指摘が多かった。

A．研究目的

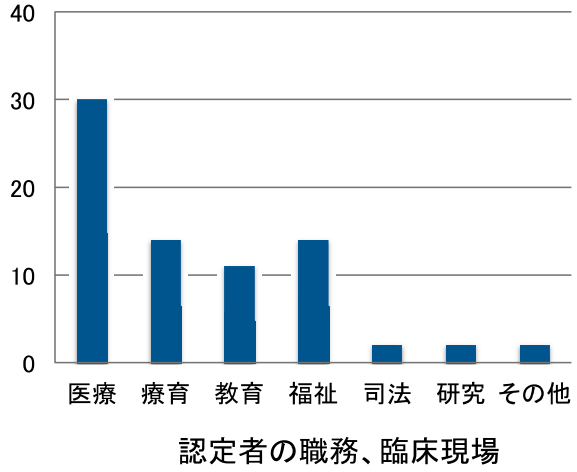
日本語版 DISCO と DISCO セミナーについて

本邦における第 1 回日本語版 DISCO セミナーは、2007 年に英国より Gould J 博士を迎え、日本人講師（DISCO 講師資格者である内山、藤岡、吉田）と共に開催された。以後、少しずつ改良を加えながら、2014 年に第 9 回まで開催された。2014 年 10 月の時点で、認定手続きが終了した受講者は、第 7 回セミナー参加者までの計 82 名である。第 8 回セミナー受講者は、追加課題を作成し、Lorna Wing centre による認定手続を待っている。

本邦における DISCO セミナーについては、これまでの開催を通じて受講者から個別のフィードバックを受けてきた。しかし、英国および諸外国での DISCO セミナーについての報告は少なく、日本語版 DISCO セミナーの内容や日本語版 DISCO の臨床現場における有用性についての評価はされていなかった。

目的

1. 日本版 DISCO セミナー受講者による７年間の評価の報告
2. 日本版 DISCO の臨床的有用性と限界を明らかにする。



発達障害の専門家としての経験

中央値10年（2～33年）

発達障害診察・面談数	（例）
>20例／ 週	19
5～20例／ 週	14
>4例／ 月	2
<5例／ 年	1

図１　DISCO 認定者の背景

B．対象と方法

2014 年 8 月～10 月にかけて、日本語版 DISCO セミナーを受講（2007 年～2012 年）し認定された 82 名に対し、郵送及び E メールにより研究への参加を依頼した。82 名のうち連絡が可能でかつ参加への同意が得られた 49 名に郵送及び E メールによりアンケートを送付し、46 名について回答を得た（46/82=56.1%）。

アンケートは下記の 5 項目に大別される。

1. 日本語版 DISCO 認定者（以下 DISCO 認定者）のプロフィール
2. DICO 認定者は、DISCO をいかに使用しているか
3. DISCO の有用性と限界について考える
4. 他の評価・診断ツールとの比較
5. DISCO セミナーについての自由記載

C．結果

結果 1. 日本語版 DISCO 認定者のプロフィール

開催当初、参加を医師に限定していた。この影響もあり、89%が医師であった。DISCO認定者は、発達障害の専門家としての経験が長く、日常業務でも多くのケースを扱っていた（図１）。

DISCO 認定者は、さまざまな質問紙や評価ツールを使用し、自閉症スペクトラム、DSM、ICD などの診断を重複使用していた（図２、３）。

結果 2. DICO 認定者は、DISCO をいかに使用しているか

半数以上の DISCO 認定者が DISCO を臨床業務に用いていたが、マニュアルを部分的に／考え方として利用していると回答するものが少なくなかった。初診に、DISCO を用いているとの回答が約半数であった（図４）。

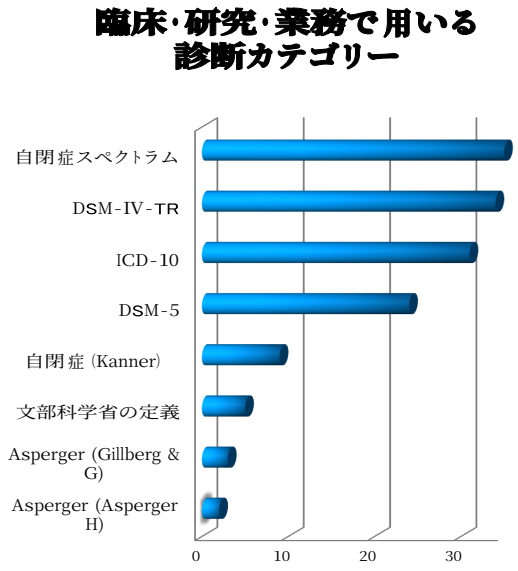


図２　DISCO 認定者の臨床・研究・業務で用いる診断カテゴリー

図３　DISCO 認定者の臨床で用いる質問紙や質問面接法、行動評定尺度、観察尺度

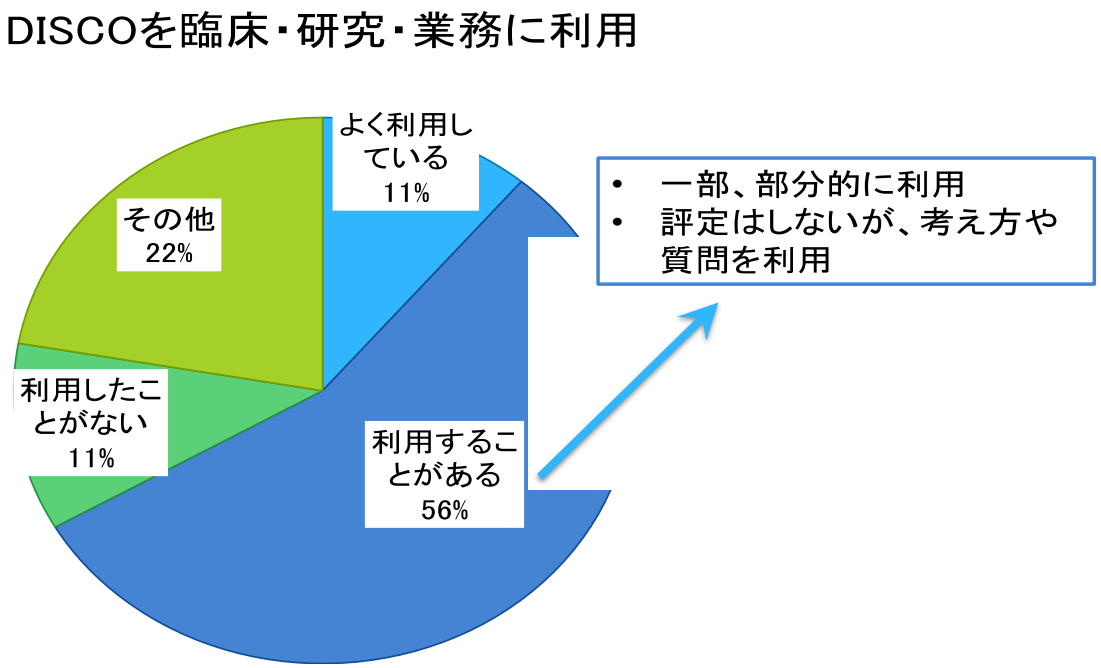


図４　DISCO 認定者の、臨床業務における DISCO の利用

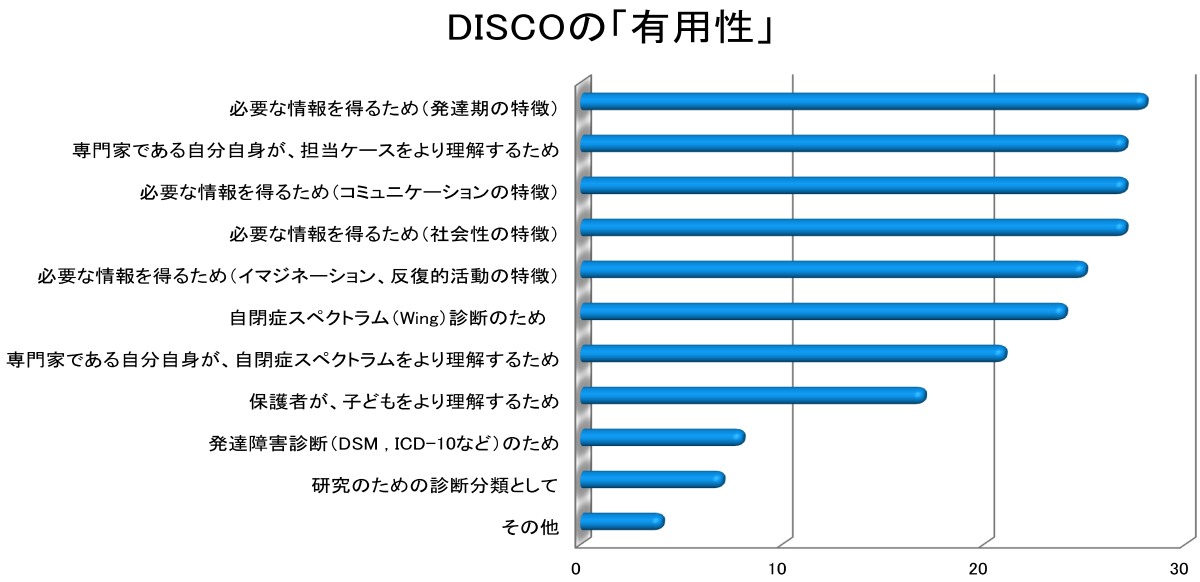


図５　DSICO **認定者からみた、**DISCO **の有用性**

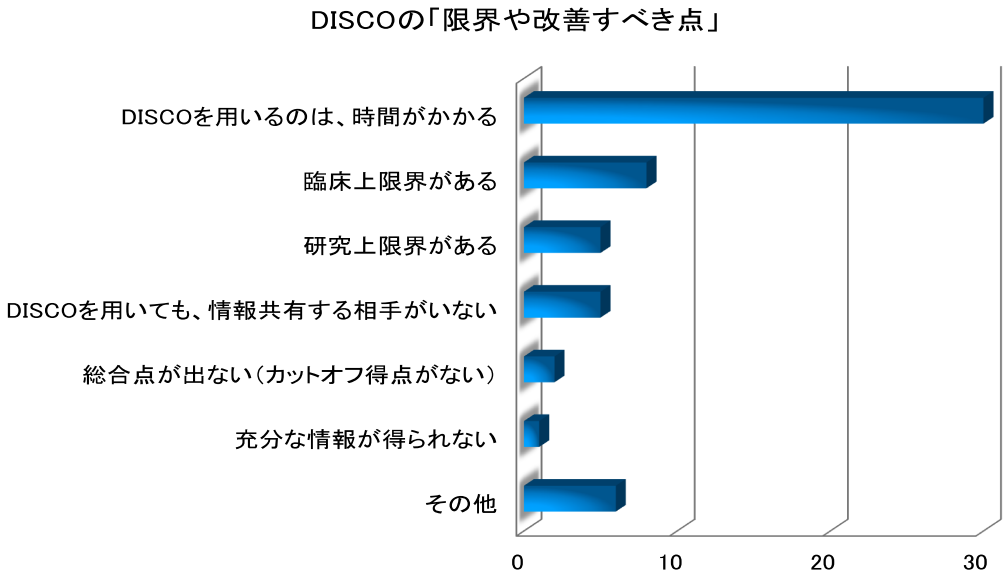


図６　DSICO **認定者からみた、**DISCO **の限界や改善すべき点**

結果 3. DISCO **の有用性と限界について考える**

DISCO **の有用性を、「自閉症特性の必要な情報をとるため」「専門家である自分自身が担当ケースをより理解するため」、という選択肢が高率に選ばれた。限界・回旋点としてはとしては、「時間がかかり過ぎる」との指摘が多かった（図５、６）。**

他の評価・診断ツールとの比較

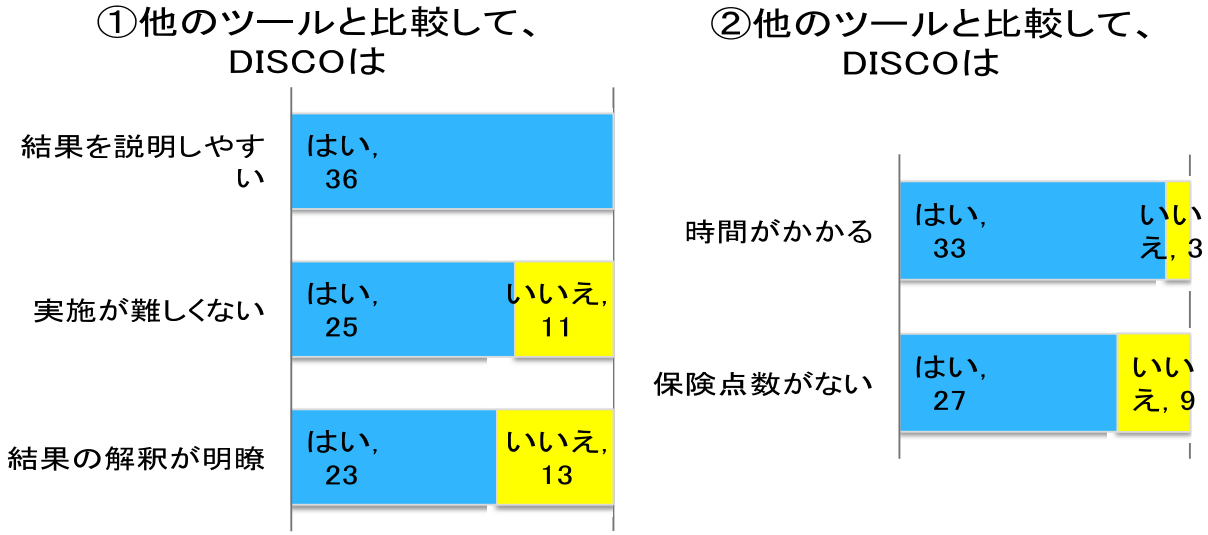


図７　DISCO と、他の評価・診断ツールとの比較

結果 4. **他の評価・診断ツールとの比較**

他の診断ツールと比較して、「結果を説明しやすい」に全員が同意した。また、９割以上が「時間がかかる」と答えた（図７）。

結果 5. DISCO **セミナーについての自由記載**

臨床業務上、保険でみとめられていないことや、コスト負担の問題が提起された。研究において、DISCO を使用する専門家がいる一方で、北米の質問、評価に比べ軽んじられているという指摘があった（図８）。

シンポジウムにおけるディスカッション

シンポジウムでは、フロアからは、多くの意見、質問があり、学会参加者の DISCO セミナーへの関心を示すと考えられた。DISCO のために２～３時間（あるいはそれ以上）が必要とされるため、インタビュイーである保護者・インタビュアーである評価者双方に負担のあること、その一方で、ケースの評価のために、ほかの評価法にはない利点があること、保護者・評価者双方にとってインタビューそのものが教育的であること、といった意見が交換された。

D．考察

1. 日本語版 DISCO 認定者へ質問紙にて調査を行った。
2. DISCO は、臨床・研究に用いられている。
3. DISCO は、診断評価、研究、ASD 理解に有用で、支援に役立つ。
4. その一方で、ほとんどの DISCO 認定者が、DISCO 面接が長時間であることを指摘した。
5. 臨床業務では、DISCO を部分的に使用していることが少なくなかった。
6. 臨床業務上、保険でみとめられていないことや、コスト負担の問題が提起された。
7. 研究に DISCO を使用する専門家がいる一方で、北米の質問、評価に比べ軽んじられているという指摘があった。

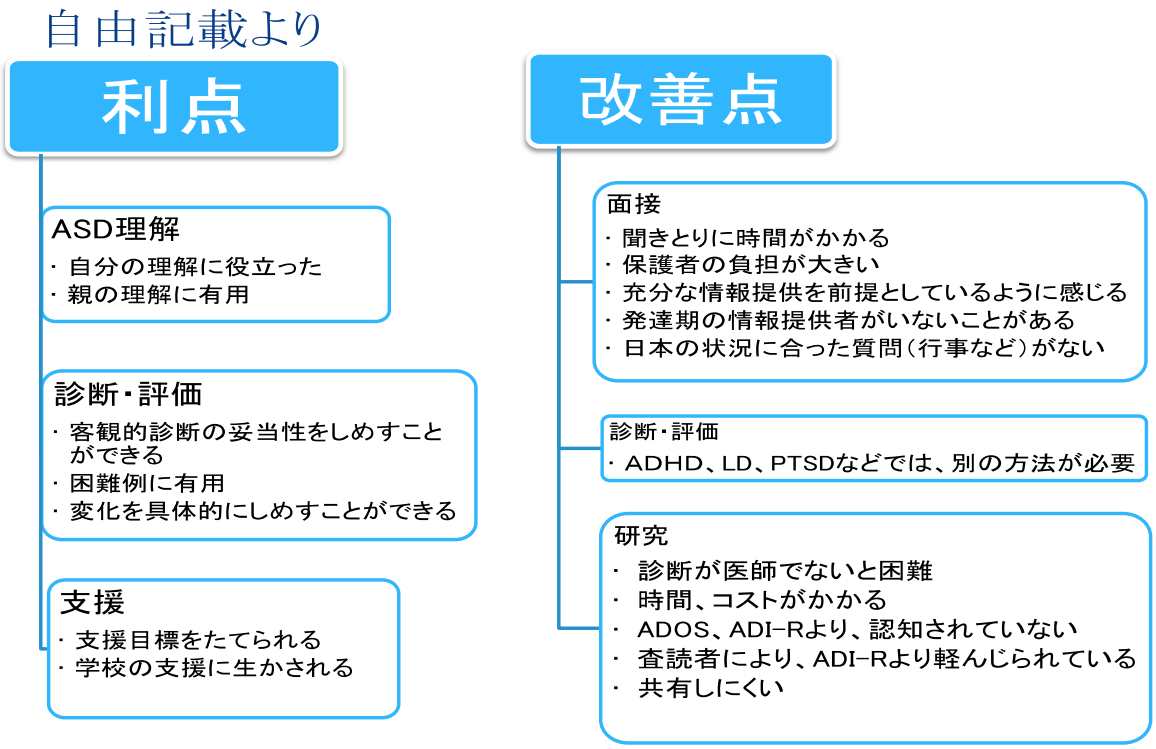


図８　DISCO 認定者による、DISCO についての意見（アンケート自由記載より）

E．結論

日本語版 DISCO 認定者へ質問紙にて調査を行った。DISCO は、臨床・研究に用いられ、診断評価、研究、ASD 理解に有用で、支援に役立つ。臨床業務では、DISCO を部分的に使用していることが少なくなかった。

F．健康危険情報

特記すべきこと無し

G．　研究発表

第 55 回日本児童青年精神医学会（2014 年 10 月 11 日～13 日、浜松）
ワークショップ 4　「DISCO」

H．知的財産権の出願・登録状況

無し